松本市美術館 news［あーとふる］
MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART
2017.07 Vol.53

artful

呼吸する背景

日本を代表するアニメーションの背景画家・美術監督のひとりとして活躍を続ける山本二三の展覧会を開催いたします。

山本二三は1953年、長崎県・五島列島生まれ。絵画と建築を学び、アニメーションの背景画の仕事を手掛けるようになると、24歳という若さで、宮崎駿監督のテレビアニメ「未来少年コナン」の美術監督に抜擢され、その後も数々の名作アニメの美術監督を務めました。

背景画は、アニメーションの中でキャラクターを支えるだけでなく、その世界観をつくり出す重要な役割を担います。徹底した取材と考え抜かれた構想、そして精密な描写から生まれる山本の背景画は、実にリアリティに富んでいます。音やにおい、空気までもが描きこまれ、画が息をしているかのよう―。だからこそ、彼の携わった作品は、見るものを自然とアニメーションの架空世界へ誘うのかもしれません。

空と雲の表現はまさに圧巻。特に「天空の城ラピュタ」に登場する、青々と晴れた空に渦巻く積乱雲は、ファンの間で〝二三雲〟、または〝ラピュタ雲〟と呼ばれ親しまれています。掲出の《踏切》は、「時をかける少女」ポスターの原画。内側から光を放つ、ボリュームミーで流動的な〝二三雲（ラピュタ雲）〟が印象的です。

本展ではアニメーション用の背景画を中心に、初期から松本の風景を描いた最新作まで約220点を一堂にご紹介いたします。日本アニメーション界の巨匠・山本二三による究極の背景画世界をたっぷりとお楽しみください。

中澤 聡（当館学芸員）

時をかける少女《踏切》2006年 ©「時をかける少女」製作委員会2006

松本市市制施行110周年記念・松本市美術館開館15周年記念

日本のアニメーション美術の創造者

山本二三展

The World of YAMAMOTO Nizo, Master of Japanese Animation Art Director

天空の城ラピュタ、火垂るの墓、もののけ姫、時をかける少女

/art Exhibition Guide

2017年7月15日［土］～9月18日［月・祝］

休 館 日／月曜日（祝日の場合は次の平日）※8月は無休
開館時間／9:00～17:00（入場は16:30まで）
観 覧 料／大人1,000円、大学・高校生800円、中学生以下無料
※20名以上の団体は各100円引き。
※中学生以下無料。障害者手帳携帯者とその介助者1名無料。
【リピート割引】大人600円、大学・高校生400円
※2回目以降の観覧料。要半券呈示。他の割引との併用はできません。

【主催】SBC信越放送、松本市美術館　【共催】一般財団法人松本市芸術文化振興財団
【後援】長野県、長野県教育委員会、松本商工会議所、松本観光コンベンション協会、信濃毎日新聞社、市民タイムス、松本平タウン情報　【協力】絵映舎　【企画協力】神戸新聞社

ポルカドット号探検記 第18回

諏訪湖の怪物

細川宗英《鐸》1974年 諏訪清陵高校所蔵（信濃毎日新聞社発行の作品集より）

ひところ駅前や公園の一角にブロンズや石の彫刻がよく建てられていた。何かの記念や人物を顕彰するためのモニュメントだが、その由来が忘れられると人々は彫刻には目もくれず通り過ぎてしまう。

今回紹介する作品はしっかり大地に根を張って立っているように見えたがどうだろう。桜の散りかけた頃、巨大な甲虫のようなこの彫刻を見に諏訪に出かけた。当館で秋に回顧展を予定している彫刻家・細川宗英（1930～1994年）の《鐸》だ。湖畔の高台に位置する学校の前庭に置かれている。

風雪に耐えて千年も経たような風貌。あたりを睥睨するように静かに立っている。古墳時代の儀礼用の鐘、銅鐸に想を得たのだろう。たしかに出土品のように風化した金属片が、幾重にも貼付き何かに抗して立ち上がろうとしている。やせ細り芯のように残った脚とまだ踏張る無骨な脚とで、何か大事なものを支えているようだ。現代彫刻でありながら太古に遡る土地の霊とも親和する、屋外彫刻の傑作といってよい。像を巡りながら見上げると表情がどんどん変わり、ドラマを見ているようで飽きない。

だが、細川ほど特異な個性をもった彫刻家も珍しい。西洋起源の近代彫刻を咀嚼した先に日本古代の遺物に関心をもち、それだけでなく現代にまで通じる人間の心理を探求した。絵巻に描かれた地獄や餓鬼の様相を参照しながら、実は昔も今も変らない人間の心の奥底を立体化してみせたのだ。

細川宗英は自身も卒業生であったこの学校近く、諏訪湖を見下ろす山の中腹の墓で眠っている。雲が重くたれ込めて湖を覆っている日だったが、微かに日が差すとただならぬ気配が漂った。湖面に響く太古の鐘の音だろうか。

松本市美術館館長 小川 稔

25 Relay Essay リレーエッセイ

時代物のドラマ

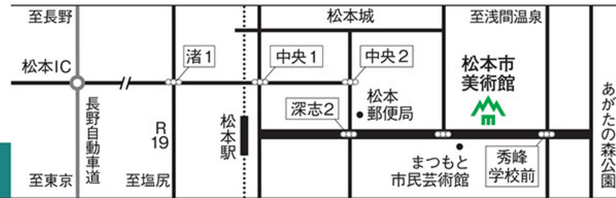
昨年の大河ドラマ「真田丸」を毎週楽しみに見ていた。密かな楽しみは衣装であった。豊臣家や徳川家の豪華絢爛さとは一線を画し、真田家は、絞り染めが一族のユニフォーム。また配役によって定番色があり、物語の展開によって色が変化した役もあることに気がついた。

さて、海と時代を越えて。1922年、エジプトでツタンカーメン王の王墓が発見された。その発掘のスポンサーであった英国貴族カーナヴォン伯爵の居城ハイクレア城で近年、イギリスの人気ドラマ「ダウントン・アビー」の撮影が行われていた。架空の伯爵一家クローリー家を描いたこのドラマは、美術や衣装なども見どころだ。調度品をそのままにして広間や居室で撮影が行われており、映像の端々にうつる絵画や暖炉上の東洋磁器、家具、建築などは、どれもハイクレア城の歴史を感じさせる。スタジオ撮影では再現できない空間だろう。また、貴族たちの豪奢な布貼り椅子とは対照的な使用人部屋の簡素な木製椅子は、民芸家具のルーツと思うと感慨深い。

このドラマはタイタニック号沈没事件（1912年）から始まり、最終シーズンは1920年代半ばが舞台となっている。シリーズを通してアールヌーヴォー風のドレスをまとうのは老伯爵夫人。年若い女性たちのファッションは終盤、アールデコ風へと移る。なかでも目立つのは襟足が見えるほどのショートヘアに流行のギャルソンヌルックを颯爽と着こなす伯爵家の長女。アクセサリーも時代を映す。メイドたちのスカート丈も第一次大戦までは足元まであったものが、いつのまにかひざ下が見えるほど短くなっている。目まぐるしく流行が移り変わり始めた様子がうかがえる。

時代物のドラマや映画は、時代考証や美術、衣装の出来があってこそ、脚本の面白さも引き立つのだと思う。

武藤 美紀（当館学芸員）



松本市美術館 news あーとふる 編集・発行
松本市美術館
MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART
〒390-0811 長野県松本市中央4-2-22 tel 0263-39-7400 fax 0263-39-3400
http://matsumoto-artmuse.jp
リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

Workshop
ワークショップ

さあ、美術館を探検しよう！

おだやかな陽気の日、近隣の保育園から、子どもたちが美術館中庭の芝生に遊びにきます。静かな美術館が賑やかとなり、ほほえましい光景が広がります。

美術館の中でも楽しんでもらえたら―、初めての美術館体験を楽しいものにしたい―。そんな願いからはじまった「はじめてのびじゅつかんさんぽ」は、就学前の子どもたちとその保護者を対象としたプログラムです。「探検！びじゅつかん！」と題したシリーズは、子どもたちとお話しながら、またはワークシートを用いて親子で楽しみながら、作品に親しむ企画。巡る会場、出会える作品は各回さまざま。次回は、文字がたくさん並ぶ展示室で開催します。どうやったら子どもたちの心をつかみ、感じているものを引き出せるのか、ぎりぎりまで悩みます。そんな苦悩はよそに、柔らかな感性、自由な発想で作品を楽しむ子どもたちの姿には、常に驚きと発見がたくさん。そっと脇で様子を眺めてみるのもお勧めの企画です。

堀井　真美（当館学芸員）

※画像は全て昨年度までの様子

●はじめてのびじゅつかんさんぽ「探検！びじゅつかん！」
日時：7月26日（水）10:30～11:00 会場：上條信山記念展示室 対象：2～6歳のお子さんとその保護者10組

要事前申込

見学は自由（要観覧券）。次回以降については美術館HP等でお知らせします。

身近なART（アート）

ねこ

少し前、イギリスの博物館が所蔵している約二千年前の屋根瓦に、猫の足あとがついていたというニュースが流れた。日干しの最中に踏みつけられたようだ。それほど古くから人の営みの近くにいた猫は、やはり、絵の世界にも頻繁に登場する。

歌川国芳・広重などの浮世絵師たちは、生活に溶け込む猫を描く天才。のんびりと佇み、美女と戯れ、時に人間の代わりに踊り出す猫は、当時の人々の有様までも画上に映し出す。猫を通して浮き彫りになる古今の風俗の違いもあり、まるでリポーターだ。

一方、有名な竹内栖鳳の猫《斑猫》は、生活感や日常からは大きく切り離される。振り返ってこちらを見る猫のしなやかな体や柔らかい毛並み、吸い込まれそうな碧の目。この作品で猫は、人の支配の及ばない、生き物の幻想的な美を表現する役割を担う。

人のすぐ近くで、野生を失わずに生きている。掴めない在り方が多様な表情として表れる猫は、永遠に魅力的な画題であり続けるのだろう。

麻生　沙絵（当館学芸員）

松本市美術館の「ねこ」
石井鶴三《猫》1939年 ©Keibunsha,Ltd.2017/JAA1700080

視る

細川宗英《王妃像No.1》

崩れた首、欠けた左腕、えぐれた乳房…。遥か遠くを見つめる瞳の奥にあるものは愁いか、微かな希望か。

細川宗英（松本市生まれ）は、38歳の時、第一回文化庁芸術家在外研修員として渡米し、のちにメキシコ、ヨーロッパを旅した。ユカタン半島でマヤ文明の遺跡を見てまわり、廃墟の中、朽ちかけた人体レリーフの断片を見出す。崩れかけながらも訴えかけてくる執念のようなものに心打たれ、帰国後、「男と女」「王と王妃」の連作を発表した。

《王妃像No.1》制作の数年前、50歳代前半頃、細川は肝臓を患い入退院を繰り返す（63歳で肝不全により逝去）。54歳の時、命をしぼり出すように本作は制作された。三角柱状の垂直的な幾何学模様の下半身から豊満な上半身へ、そして頭部の三角錐形の造形物へと気脈が貫通する立ち姿は、汚泥（おでい）に咲いた一輪の蓮の花のように美しい。

細川は言う。

創造の行為は一片のかけらでも残ればよい。そこには壊しきれない人間の呪文が生き続ける。風化したもの、崩れ行くものは限りない重みをもって現存し、現代の空間に厳しく存在を主張している。生きた証（あかし）は未来永劫のまぶしさをとどめ続ける。彫刻のかけがえのない魅力はそこにあるのだろうか。

ギリシャ彫刻やヨーロッパ近代彫刻の流れを汲む造形美とは別の、赤裸々な人間像、その存在の美を追求した細川宗英の代表作である。

大島　武（当館学芸員）

作品名＝《王妃像No.1》　作者＝細川宗英（1930～1994年）
データ＝1984年 ブロンズ・着色　サイズ＝210.0×90.0×70.0cm

日本浮世絵博物館からのお知らせ

日本浮世絵博物館所蔵

酒井浮世絵コレクション展示

会場：池上百竹亭コレクション展示室
会期：［前期］6月6日（火）～7月30日（日）［後期］8月1日（火）～9月24日（日）

このたび松本市市制施行110周年を記念し、日本浮世絵博物館所蔵品の特別展示を松本市美術館で開催いたします。

当館のコレクションは江戸時代後期の酒井家六代目、酒井平助義明（すけよしあき）（1776～1842年）の浮世絵収集に始まります。松本で紙などを扱う問屋業を営んでいたことから、1982年に酒井家とのゆかりが深い松本の地に、日本浮世絵博物館は設立されました。

今回の特別展示では浮世絵の歴史を概観していただけるよう、前期では表現技法を、後期では絵師に焦点を当て、時代を彩った作品を紹介いたします。浮世絵作品を通して、時代を超えた人々の営みに想いを馳せていただければ幸いです。

日本浮世絵博物館館長 酒井 浩志

歌川広重《東海道五拾三次之内 日本橋》
天保四（1833）年頃（後期展示）

葛飾北斎《富嶽三十六景 凱風快晴》
天保二（1831）年頃（後期展示）

日本浮世絵博物館外観